東京都障害者就労支援協議会（第35回）

資料6

精神障害者の雇用継続のための雇用側・就労支援機関・医療機関の連携の例から学ぶ

池淵恵美

帝京大学・帝京平成大学　名誉教授

この発表に関連するCOIはありません。

連携がうまくいってる実践に共通するもの

- 実際に成果を上げている支援では、利用者側からすると、「ひとりの人（が表の顔となっているチーム）」が一貫して、仕事の動機を持つ時点から職場定着までを支援していることが最も大きな特徴。
- 医療と就労支援を統合して行うことを、わが国の制度のもとで実践するためには、理念をしっかり共有して異なる機関が連携し、利用者に対してシームレスな支援を提供。

連携するために医療機関がやるべきこと

- 社会で活動していく際に、当事者の志向、強さともろさを把握しておく。

  これまでの生活歴、デイケアや病棟での活動などから可能
- 「ゆるやかなチーム」の形成：個別のケースの就労を共通の目標に、価値観や職場の文化が異なることをお互いに尊重しつつ、一つのチームとしてかかわる。当事者からはいつも一人の顔（デイケアスタッフなどこれまで一緒にリハ入りしてきたスタッフを想定）が見えるようにする。
- 入職してからは、チームに職場の担当者も加わる。

連携するために就労支援機関でやってほしいこと

- 持続してかかわる個人担当がいるとありがたい。
- その上で、生活や仕事の様子を気にかけて、ねぎらって欲しい。
- 向いている職場に出会うまで、転職が繰り返されることも結構ある。
  一緒に探していってほしい。
- 医療機関の窓口は誰になるか、医師以外で相談してほしい。

連携するために支援者にやってほしいこと

- 当事者が望む働き方（生き方）をよく聞いてほしい
- 精神障害についての知識も、可能な範囲で知っており、病状悪化の時に取るべき対応について知っていて欲しい
- 当事者が自身の力を知るための場を工夫してほしい―作業能力、対人能力、セルフモニターの力など
- 症状の悪化は職場や生活の変化やストレスから起こるので、何か変化がなかったか、留意してほしい。

連携によって仕事が長く続いた例（架空症例です）

- 貴子さんは30代女性。薬物療法によっても改善しない幻聴と妄想があり、薬物療法の副作用によるジストニアもあり、デイケアでの活動も精いっぱいだし、途中で何回か妄想による中断もあった。
- 貴子さんはまじめで、料理のプログラムでは、最後まで丁寧にふきんを洗ったりしていた。そして家族に迷惑をかけたくないと、就労を希望していた。
- 自宅にいると、兄夫婦に気兼ねして具合が悪くなるので、母親も外での活動を希望した。

貴子さんとデイケアの受け持ちスタッフの粘り勝ち

- はじめはデイケアとよく行き来している就労支援機関に相談したが、担当者が無理ではないかと尻込み。受け持ちスタッフが粘って貴子さんの良いところをいろいろ説明し、実習期間中休まず通って、貴子さんがやる気を証明して、何とか支援してもらえることに。
- ハローワークでも全く同じようなやり取りがあり、やっと3者でチームを組むことにこぎつけた。幻覚や妄想が表に出てきたら、主治医が対応する事も言明した。
- 貴子さんは、呑み込みが悪くスピードも遅いが、責任感があって最後まで頑張るところがチームで共有された。

障害者就労へ

- ハローワークの担当者の好意で、今までも障害者雇用の実績があり、担当者が慣れている美容関係のお店のバックヤードに週20時間で雇われた。
- ていねいに教えていただき、ゆっくり仕事を増やすことで、時々失敗するものの貴子さんは仕事を覚えていった。帰り道に、自分へのご褒美でドーナツとカフェオレを楽しみに、貴子さんはがんばった。
- 定期的に、デイケアの担当者には貴子さんからの報告があり、貴子さんの安心できる時間であるとともに、関係者で順調にいっていることを共有できた。

幻聴の出現

- 順調に見えたが、ある日「店長にもう来なくていいといわれた」とスタッフに相談し、すぐ受診するように言われて貴子さんが来院した。
- 特に環境の変化も、家族の変化も、クスリの変化もないのに・・・・・
- 就労支援機関の担当者が職場訪問し、店長さんとあれこれ検討したが、やはり何も変化はないとのこと。
- デイケア担当者が、1年の契約更新の時期が近付いていることを思い出し、「契約更新されるから大丈夫」と話すとともに、店長さんにお願いして、「引き続きお願いします」と言ってもらい、それで幻聴が収まった。

チームで対応を共有する

- その後も、仕事のミスがあったとき、新しいアルバイトの人が雇われたときなどに、きまって「店長がもう来なくていいといった」と幻聴を訴えた。
- 関係者で相談し、店長に皆に聞こえるように「貴子さん、頑張っているから引き続きお願いします」と言ってもらい、ジョブコーチからも、「よくやっていると褒められてますよ」と言ってもらった。以後この対応はチームで共有された。
- 主治医からは「よい評判を聞いています」と話すとともに、幻聴と本当の店長さんの話を区別するにはどうしたらよいか、話し合った。

幻聴が訴えられなくなった

- ある受診日に、貴子さんは社内報を持参し、よく頑張っている人ということで取材を受け、写真が載ったと嬉しそうに報告した。
- 以来、やめさせられるという訴えはきかれなくなった！！
- その後も母親の入院、違う店への配転など、危機的な出来事もあったが、病状の悪化はなく切り抜けている。

連携がうまくいかなかった例（架空の症例です）

- 洋一さんは20代男性。もともと人付き合いは苦手だったが、勉強はよくできて、一流大学に入学した。しかしその後「教室に入ると皆がみている」というようになり、だんだん外に出られなくなった。
- 家族とともに受診し、統合失調症として治療を開始。病状が落ち着いた段階で、主治医がデイケアを勧めた。
- お昼休みは一人で机にうつぶせているなど、周りとかかわれないことが目立ったが、能力は高く、デイケア新聞の編集長に推された。

友人ができ、元気になって就労へ

- バレー大会でキャプテンを務めた男性がよく話しかけてくれ、洋一さんとのコンビで得点するようになり、初めて友人ができた。
- 「大学院に行くためにお金を稼ぐ」目標だったが、これまで働いた経験がなく、実習をいくつかやってみることになった。
- ハローワーク、就労移行支援、デイケアの3者で情報交換し、彼の事務処理能力の高さから、ハローワークの勧めで官庁の事務補助で入り、職場の上司も何くれとなく配慮してくださって、洋一さんもご両親も感謝していた。

合う職場を見つける難しさ

- はじめの半年は順調だったが、職場は緊張する、行きかえりの電車で監視されているようでつらいなど、訴えが増えてきた。その都度上司が皆との間にスクリーンを置いてくれたり、父親が車で送迎するなど、皆で応援したが、「皆さんがとても良くしてくれて申し訳ないけれど、どうしてもつらいので」と彼の意志が固く、とうとう退職することに。
- しばらく自宅で筋トレや資格の勉強をしていたが、就労支援機関の職場実習でマンションの清掃業務を経験し、一人でやれる清掃の仕事を洋一さんは選択した。

いろいろな仕事を経験してみることが大切→いくつか転職して、向いた仕事にぶつかると思う必要がある。

- 洋一さんの能力からして不釣り合いだが、一人職場で体を動かす仕事が気楽とのことだった。
- 前の職場では皆が気遣ってくれて、窮屈だったことも明かされた。
- 当事者のやりやすさをつかむ前に、周囲からの評価で職場を決めたことを反省する事例だった。